

スコットランド系ディアスポラと ルーツ・ツーリズム

山 口 覚

I. はじめに

先祖について調べ、その情報を整理するという作業は、古今東西どこにおいてもなされてきた。先祖調査や系図学 (genealogy), あるいは家族史 (family history) と呼ばれるものである。先祖調査はかつて王侯貴族や富裕者などの社会的エリートを中心におこなわれたが、現在ではより広範な人々の「趣味」となっており、先祖の故地を訪れるルーツ (先祖)・ツーリズムも珍しくない。日本では 1970~80 年代、そして 1990 年代後半以降に先祖調査が「静かなブーム」となった (山口・喜多, 2014)。日本における 1970 年代のブームの要因の 1 つには、1976 年に小説として出版され、翌年にテレビドラマ化されたアレックス・ヘイリーの『ルーツ』の影響も考えられる。『ルーツ』は、それまで先祖調査が困難だとされてきたアフリカ系アメリカ人でさえも先祖調査が不可能ではないことを知らしめた。これによって世界的な先祖調査ブームが起り、アメリカ合衆国では「エスニック系図学」という分野も派生した (山口, 2013)。

もっとも、世界的なブームは『ルーツ』の影響力だけで生じた訳ではなかった。「『ルーツ』現象は青天の霹靂ではない」(Weil, 2013, p.181) のである。人文主義地理学者の Tuan (1980) によれば、「現在ではルーツを追えなければ自らを実際に知ることはできないと広く信じられている」(p.4)。ある場所に根ざすこと (rootedness) は即自的な感覚であり、無意識での安心感があ

る。しかし流動的で不平等になった社会の中では安心感を得ることが難しくなり、自己と場所とが乖離することで「場所の感覚 (sense of place)」が生じる⁽¹⁾。このような状況において安心感や自信を得るための方策として「個人は先祖調査に、集団は歴史に頼る」(p.6)。先祖調査ブームとは故郷からの離脱、家族の離散、都市での孤立や格差の経験によって「根ざすこと」から切り離された人々が多数派となったことの裏返しである。このように、人々の心性をめぐる説明から広範な先祖調査ブームを考えることも可能である。しかし実際には、モルモン教会によるグローバルな先祖調査関連情報の収集と提供 (Otterstrom, 2008 など)、移動・通信手段の高速化や低廉化、さらに近年ではインターネットや DNA プロファイリングの導入 (Kennett, 2011) など、先祖調査ブームに関わる説明要因はいくつもあるはずである。

ところで、1970 年代以降のブームの一因を担った『ルーツ』もまた、イギリス系やアイルランド系アメリカ人などによるそれ以前からの先祖調査の影響を受けていた (山口, 2013)。1960 年初版の『アメリカ人の諸起源』(Pine, 1960) では、先祖の故国で先祖調査をおこなう際に訪問すべき図書館・公文書館やそこで得られる資料の種類など、調査に関する情報が先祖の故国を単位としてまとめられている。図 1 は同書において故国ごとに割かれたページ数を示している。数値が大きい国ほど先祖調査の手法が詳細に描かれていることになる。最大値は北アイルランドを含む「アイルランド」の 50 ページであり、「イングランド」の 48 ページ、「スコットランド」の 26 ページがこれに次ぐ。他方で東欧諸国の数値は小さく、「ユダヤ人」として章が立てられているイスラエルを除けば、アフリカやアジアについては記載がない。この図はアメリカ合衆国における『ルーツ』以前の先祖調査の状況を示しており、主に西欧へのルーツ・ツーリズムがなされていたことも理解される。

本稿で取り上げるのはスコットランドに関する事例である。スコットランドは 1999 年の権限委譲によって自治権を強化し、独自の議会と政府を有している。2014 年にはイギリス (連合王国) からの独立を問うための住民投票が実施されるなど、独立をめぐる動きも活発である。スコットランドでは国民意識

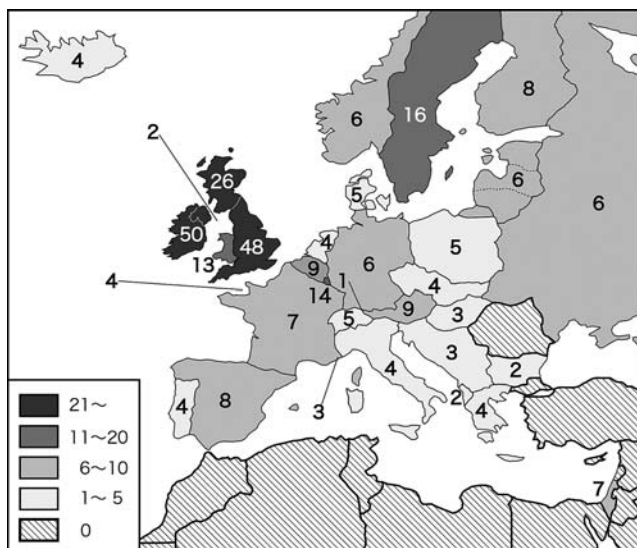


図1 『アメリカ人の諸起源』の各章のページ数に見る故国の扱い
Pine (1960) および山口 (2013) の第2図による。

が改めて醸成されてきたし、部分的には「国家」として存立している。よって本稿ではスコットランドを1つの「国」として扱っていく。

スコットランドはこうした情勢下でディアスポラに対する働きかけを強化している。ここで言うディアスポラとは、広域に離散していながらも先祖の故国に自らのアイデンティティを認める人々の緩やかな想像の共同体のことである。ディアスポラは他者の圧力によって離散させられた犠牲者として語られやすいものの、実際には労働や交易など様々な主体的理由による離散も一般的であった(コーエン, 2012)。ブルーベーカー(2009)によれば、研究者の間ではディアスポラ概念それ自体が離散してしまっている。つまり①ディアスポラの自己規定における「境界維持」を重視する研究, ②ディアスポラと他者との「境界侵食」を重視する研究⁽²⁾, そして③ディアスポラの「資源」としての活用・動員をめぐる研究があるという。特に③に関しては、自国を活気づけるためのグローバルな切り札としてディアスポラをまなざす動きが強まっている

(Agunias, ed., 2009 など)。ディアスポラ・ツーリズムを産業化する動きもその一環である。

本稿では、スコットランド系ディアスポラによるルーツ・ツーリズムの動きと、それに対するスコットランド政府などによる故国での対応を、主には関連する先行研究の知見をまとめることで見ていきたい。Leith (2014) によれば、スコットランド政府は 1990 年代のアイルランド共和国の成功例を踏まえてディアスポラに直接的に接触するようになったが⁽³⁾、ディアスポラとスコットランド政治との相互作用については研究が非常に限られているという。他方で 2007 年にディアスポラ研究センターがエディンバラ大学に開設されたように、2000 年代以降の同国ではディアスポラ関連の研究が重視されていることも確かである。

本題に入る前に、次章では、アメリカ合衆国における先祖調査の歴史的展開など、本題の前史や前提に当たる部分を見ておこう。

Ⅱ. ディアスポラの先祖調査とルーツ・ツーリズム

(1) アメリカ合衆国における「系図学の系図学」

世界的なブームの影響か、今日の先祖調査については地理学界も含めて研究が増えつつある (Timothy and Guelke eds., 2008, Nash, 2008, 2015 など)。他方でフランスの歴史学者である Weil (2013) によれば「系図学の歴史は大半が書かれないうちにされている」(p.2)。そのため彼は「系図学の系図学」(p.7) の執筆を決め、アメリカ合衆国における 17 世紀以降の先祖調査の展開を 4 期に区分してまとめた⁽⁴⁾。すなわち、①独立以前、②独立後から南北戦争まで、③南北戦争から第二次世界大戦まで、④第二次世界大戦から現在に至る半世紀である。

まず①の独立以前についてである。この時期のアメリカではイングランドの影響を受けながら貴族やエリート層の間で先祖調査がおこなわれていた。ただし植民地には系図学者がおらず、アメリカに紋章院を設置するよう本国に求め

たヴァージニア議会の主張も認められなかった。そのため、植民地人の中には、高貴な家系を探求するために自らヨーロッパに行き、先祖調査をおこなう者もあった。すでにこの時点からルーツ・ツーリストがいたのである。

このような状況は②の時期、つまり独立後から南北戦争のあった 1860 年代までの間はかなり変化する。独立戦争以前では社会的地位は主に世襲されるものであったが、独立後には人間の平等がうたわれたからである。しかし系図学的実践は変容しながら生き延びた。「個別の社会的ユニットとしての家族」という新しい概念が 18 世紀末に登場しており、家族や先祖に関する行為として系図学が正当化されたためだという。南北戦争までにはヨーロッパにはない先祖調査の大衆化が生じた。

もっとも、社会的エリートたちは自らを差異化するために対抗的な方策を試みることになる。たとえばワシントンに首都の座を奪われたフィラデルフィアでは上流階級の生き残り策として排他的な系図学的実践が重視されていた。ボストンやニューヨークの不安定な成金貴族たちも自らの慰めとして古い血統の記憶を得るための先祖調査をおこなった。

③の時期には改めて血統が重視されるようになる。南北戦争の後には文化的先祖主義 (cultural ancestralism) に基づいて「人種」という言葉が登場した。それは南北戦争によって白人の間に分裂が生じてしまったことに対して、白人間の関係を融和するための動きであった。1900 年にメンデルによって遺伝法則が周知されてからは系図学的実践は自然科学と結びつけられるようになり、ついには優生学的系図学 (eugenic genealogy) が登場する。それらは合衆国社会における人種主義、あるいはアングロサクソン主義の台頭と密接に関わるものであった。

1870 年代までには多くのイギリス人系図学者がアメリカ人のクライアントのために働き始めていた。すなわち、トランスアトランティックな系図が意識されていたのである。同時に、イングランド起源の初期入植者に関する情報を中心とした「系図学的詐称はアメリカ文化の特徴となった」(p.154)。イングランドのジェントルマンとの関係を示すために血統が捏造されたのである。

系図学的実践におけるアングロサクソン主義の台頭に対しては、マイノリティによる対抗的な動きが生じてくる。ドイツ系やスコットランド系などの人々が系図学を用いるようになったのである。これらの動きもまた人種化されていたものの、合衆国を構成する集団の多様性を示すという目的もあったという。

そして④の時期、つまり現在に至るここ半世紀には先祖調査は巨大産業化した。先祖調査は改めて大衆的な実践になったのである。1950～60年代に状況は変化し、多くの人々が公共図書館に行って先祖調査をおこなうようになったため、図書館はその動きに応えようとした。当時のイギリスの系図学者は大衆化した先祖調査を俗物的と見なしたという。さらにヘイリーの『ルーツ』が1976年に発表され、翌77年7月4日の『ニューズ・ウィーク』紙には「万人によるルーツの探求」という記事が掲載された。同時期には航空会社が「先祖の渉獵 (ancestor hunting)」というツアーを宣伝し、さらにはモルモン教会の活動、コンピューター革命やインターネットの普及、DNA系図学といった先祖調査関連のトピックが続いていく。系図学への関心を問う世論調査では、関心があるとの回答は1977年で29%、1995年45%、2000年60%、2005年73%というように上昇している。関連市場は1990年代初頭から急激に成長した。

以上のようなアメリカ人の「系図学の系図学」について、Weil (2013) は次のようにまとめている。それは自らが何者であったか、何者になりたかったかという問いへの探求だったのである。また、特にスコットランド系に関しては、19世紀後半におけるアングロサクソン主義への対抗的なエスニシティの発現とともに先祖調査者が登場したということになるであろう。

(2) イギリスの先祖調査に対する新世界の影響

イギリスには系図学の長い歴史があるが、特に20世紀以降ではアメリカ合衆国の動向から影響を受けている。イギリスの先祖調査について記した川分(2014)によれば、「イギリスでは現在、多くの非営利民間組織や営利企業が国公立図書館・文書館と協力しながら、史料・文献のデジタル化と利用の高度

化に努めている。いや、イギリスというところかなり語弊がある。むしろ、これらの動きはアメリカ発である」(pp.121-122)。

アメリカ合衆国を含む新世界の影響ははるかに以前からあるとしても、おそらくイギリスにおける先祖調査の大衆化にはモルモン教会が関係している。Blain (2014) は、自身が先祖調査を始めた 1980 年代では、調査における最初の行き先はモルモン教会であったと記している。スコットランドにはモルモン教会の家族史センターが 15 ヶ所あるという (Taylor, 2014)。Blain によれば、21 世紀以降の今日では、モルモン教会が運営するインターネット・サイトである Familysearch, アメリカ合衆国を中心とした世界最大のオンライン・コミュニティである Ancestry.com, イギリス資本の Find My Past を最初に訪れるべきだという。すでに先祖調査はインターネットで情報提供がなされるグローバルかつ簡便な実践となっているのである。

新世界の先祖調査者はインターネット情報を収集するだけでは不十分なため、ルーツ・ツーリズムをおこなうこともある (Sim and Leith, 2013)。次節では、より包括的な概念であるディアスポラ・ツーリズムについて触れておこう。

(3) ディアスポラ・ツーリズム

ディアスポラを故国の「資源」として活用・動員するという場合、ディアスポラ・ツーリズムはその中心的な実践となる (Newland, 2011 など)。それはニッチ・ツーリズムであり、「ポストモダン・ツーリズム」の 1 つと見なすこともできる (Birtwistle, 2005)。ディアスポラは故国の国民ではないが、完全なる他者でもない。よってそのツーリズムの在り方は国際・国内ツーリズムの中間に位置づけられる。たとえば国外移住してからまだ日が浅く、知人が故国にいるようなディアスポラは、国内ツーリストや現地の人々が利用する施設を利用する。こうした種類のディアスポラを対象にすればツーリズム産業への参入が容易となる。他方でディアスポラは海外での経験によってツーリズム産業を国際ツーリストから期待される水準に引き上げてくれる。ディアスポラ・ツ

ーリストは口コミで広告してくれるため、投資家やその他の旅行者を引き付けるきっかけにもなる。

ディアスポラの先祖が暮らした故地はそれぞれ異なっており、たとえ支出額は多くないとしても、ルーツの探求や墓参などとの関係からローカルな場との結びつきが期待される。また、ディアスポラ・ツーリズムは通年的なものであり、季節に左右されない。

ディアスポラ・ツーリズムには先祖の故国をめぐる教育的なツアーも含まれる。たとえば **Fund for Armenian Relief, Birthright Israel** といったものがある。もともとはバミューダ政府によって提唱されたものであり、奴隷貿易のルートを記憶することを目的にユネスコがサポートする **African Diaspora Heritage Trails** といった事業もある。2009 年と 2014 年にスコットランドで 1 年を通じて実施された **Year of Homecoming** は、ディアスポラ・ツーリズムをめぐる大規模なイベントとして注目されるものであった。

(4) スコットランド系ディアスポラのルーツ・ツーリズム

Bueltmann (2012) はスコットランドへの「ルーツ・ツーリズムのルーツ」が 19 世紀末から 20 世紀初頭に見出されるとしている⁽⁵⁾。ブルジョアによる帰還旅行は 19 世紀におけるグランドツアーと似たものであった。その後、19 世紀末にはより早くより安い船旅が帰郷の人気を高め、ルーツ・ツーリストを増加させた。1860 年代にはニュージーランドからスコットランドまで 3 ヶ月以上かかったが、1890 年代には 6 週間に短縮された。

その後、第二次世界大戦を経て 1950 年代になると、アメリカ合衆国などでスコットランドに由来するハイランド・ゲームの組織やスコットランド協会が設立されていく。1960～70 年代には空路の利用が盛んになることで故国とのつながりが強化された (Sim and Leith, 2013)。さらにアメリカ合衆国では 1976 年の建国二百年祭に際して、同国の歴史を作ってきた先祖たちへの関心が拡大した。『ルーツ』の出版・放映も影響したことであろう。こうした中、1951 年と 1977 年にはトランスアトランティックなクラン (氏族) の集会

(gathering) が開催され、当該クランに先祖を持っていたり、そのように自認する人々が大西洋を越えて集まった (Hesse, 2012)。

もっとも、こうした動きにもかかわらず、スコットランド観光局は 1990 年代まではルーツ・ツーリズムに対応する動きを見せなかったという (Ray, 2012)。スコットランドにおいて自治権の拡張や独立をめぐる議論が活発になされ、実際に 1999 年に権限委譲がおこなわれる中で、故国においてようやくディアスポラ関連政策が重視されるようになったのである。次章ではスコットランド系ディアスポラに対する故国での対応を見ていく。

Ⅲ. スコットランドにおける先祖ツーリズム戦略

(1) スコットランド系ディアスポラを想像する

ところで、そもそもスコットランド系ディアスポラとはどのような人々であり、どの程度の人口規模なのであろうか。スコットランドからの出移民についてしばしば言われるのは、1790～1880 年頃におこなわれたスコットランド版エンクロージャーである「ハイランド・クリアランス」によって土地を追われ、海外に向かったという話である。もともとはクランの一員であった人々が、イングランドの貴族システムの影響下で貴族化していったクラン・チーフによって排除されたというのである。これはスコットランド系ディアスポラの間で出移民の悲劇として語られるマスター・ナラティブである。もっとも、コーエン (2012) が言うように、「イギリス移民の大半は、ブリテン諸島にいるよりも大いに新たなチャンスがある、平たくいってしまえば土地と仕事があると考えて渡っていった」(p.150) ことであろう。

Devine (1999) によれば、1820 年代から第一次大戦までの間にスコットランドからは 200 万人の出移民があった。人口に対する比率としてはアイルランドやノルウェーと並ぶ高率であり、イングランドへの移住も含めれば、スコットランドが「ヨーロッパにおける出移民の首都」(p.468) と呼べる状況にあったことは確かだという。

では、こうした出移民の子孫であるスコットランド系ディアスポラは、世界中にどの程度いるのであろうか。アメリカ合衆国では1980年代のセンサスから先祖に関する質問項目が置かれるようになり、2000年からは複数回答可になった。2010年の合衆国センサスでは550万人がスコットランド系と答えたという。オーストラリアでは2006年の統計で150万人とされた。

こうした統計上の数値はあるものの、グローバルに展開するディアスポラの人口を確定することは不可能である。たとえばLeith and Sim (2014)ではスコットランド系ディアスポラを4000万～8000万人と見積もっている。2009年のYear of Homecomingの一環として実施された「スコットランド系ディアスポラ・フォーラム」の関連ウェブサイトでは3000万人以上と公表された。スコットランド観光局は「スコットランドに先祖を持つ人々は世界中に5500万人おり、スコットランドにルーツを持つ米国人は1100万人から1500万人の間であると考えられる」(The Scotsman 2006. 6. 1)と言い、ハイランドおよびアイランズ企業庁は「世界中では約9000万人が、少なくとも1人のスコットランド人曾祖父母を持っていると主張」した(喜多・山口, 2008 参照)。

このようにディアスポラをより多く見積もろうとする理由の1つは、故国の人々がディアスポラに対する「マーケティングの機会」⁽⁶⁾を感じていることにある。

(2) スコットランド系ディアスポラの自己認識

スコットランド系ディアスポラは故国から様々に見積もられ、政治や経済上の対象とされている。では、ディアスポラとはどのような人々なのであろうか。Basu (2006)は、ディアスポラの自己認識が強化され、新しい白人エスニック運動としてルーツが探求されるようになってきた理由を考察している。その説明の一部はTuan (1980)と重なる。近代的疎外や過度の個人主義にとらわれている多くの人々は「構造的トラウマ」を有している。構造的トラウマとは依拠すべき絶対性の欠乏によって生じる疎外感を意味し、失われた絶対性

を克服するための何かを求めるようになる。構造的トラウマはこのとき、自らが経験したものではない「傷ついた文化」という「歴史的トラウマ」と結びつき、歴史的現象と自らを重ねて考えるという認識が生まれる。スコットランドからの出移民のすべてがハイランド・クリアランスの被害者ではなかったにも関わらず、構造的トラウマにとらわれたディアスポラの多くは歴史的トラウマと結びつくため、自らをハイランドのクランから排除された先祖と関連づけて考えるようになるのだという。

なお、クランをめぐるディアスポラのアイデンティティは父系に限られるものではなく、およそ5～6世代の親族が関わる複数のクランの中から、自らが適切だと感じるクランが選択される (Ray, 2012)。もちろん多くの場合には先祖調査を実施することによって自らの家系を確認する作業もなされるであろう。いずれにせよ、スコットランド系ディアスポラの多くは、故国と言えはハイランドを想像し、クランの一員だと主張することになる。

2009年に実施された75人のディアスポラに対する Sim and Leith (2013) の質的調査では、少数の者はスコットランドの状況について良く理解しており、約半数はいくらか理解していた。しかし政治状況に通じているのは25%であった。大半の回答者がいくらかの先祖調査をおこなっており、先祖がいつ、どこから出国したかを知っているが、大半はそれほど詳細ではない。多くのディアスポラにとって重要なのはスコットランドの現況ではなく、詳細な系図でもなく、先祖や歴史をめぐる多少の情報を手がかりにした、想像され理想化された過去の姿なのである。ディアスポラは、故国に対してそれらしさをより強く求める点で現地の人々とは異なっている。スコットランド在住者の中には、ディアスポラについて「スコットランド人よりもスコットランドの (more Scottish than the Scots)」であるとして困惑を持って見る者もある。こうした過去志向のディアスポラはルーツ・ツーリズムをおこなうことも珍しくないであろう。しかしスコットランド観光局は1990年代まではそうした動きに対応してこなかった。ルーツ・ツーリズムへの対応はローカル・レベルで先行したのである。

(3) ローカル・レベルでのツーリズムへの対応

Birtwistle (2005) の報告はルーツ・ツーリズムに対するローカルな対応策をまとめた貴重なものである。同稿の対象地はスコットランド南西部のエアシャイアとアラン島である。

この地におけるルーツ・ツーリズム関連の中心的組織は 1993 年に設立されたエアシャイアおよびアラン島ツーリズム事業フォーラム (A&ATIF) であった。1998 年にはアマチュア先祖調査者からの投書によってルーツ・ツーリズムの潜在的需要が理解され、関連事業に関わる人々を教育する必要性が出てきた。翌 99 年には家族史プロジェクトグループを設置した。これはスコットランド観光局が先祖調査に焦点を当てるようになった 1 年半前のことである。2003 年にはエアシャイアおよびアラン島ツーリズム・フォーラムへと改称され、特に「家族史プロジェクト・グループ」は旧 A&ATIF 執行部、地元の家族史協会や郷土史家、図書館、公文書館、専門の系図学関連会社、観光行政機関などによって構成されていた。また、主要な観光地の入り口でツーリストへの面接調査を実施した際には、先祖調査者の需要が改めて確認されたが、電話サービス・センターや地元のタクシー運転手といったサービス供給面において先祖調査者から要求される情報のレベルに対応できていなかった。そこで以下の対策が採られた。①先祖調査のための地域の情報に関するリーフレットの作成、②先祖調査関連の知識を地元の関係者に提供するための教育ビデオの作成、③エアシャイアのホームページのポータル（入口）における先祖調査関連ウェブサイトの配置。このようにローカルな場においてルーツ・ツーリズムの需要が確認され、それについて対策が練られ、産業化していったのである。

(4) ルーツ・ツーリズムの産業化と諸実践

スコットランド観光局は 2000 年に「スコットランド・ツーリズム新戦略」を打ち出し、その一環として実施したサーベイ調査では先祖調査者に焦点が当てられた (Birtwistle, 2005)。その際にはアメリカ人の 19% がスコットランド訪問の意思決定において家族のルーツが主要な要因であったと答え、さらに

これらの訪問者の 10 人中 1 人はスコットランド滞在中に先祖調査をおこなっていたことが判明した。同時期にはブリテン観光協会がニューヨークでアンケート調査をおこない、多くのアメリカ人がスコットランドでのルーツの探求に関心があることが理解された。これらの結果を踏まえて同年にはスコットランド観光局で「先祖調査マーケティング戦略」が採用され、プロモーション活動が計画成功のための基礎とされた。また、インターネットではスコットランドの遺産や系図学に関する情報が過剰に流れていたものの、ルーツの探求のためにスコットランドを訪問しようとする人々に対する基礎的な情報は提供されていなかった。

2001 年にはスコットランド観光局が **Scottish Tourist Board** から **VisitScotland** へと改称され、その翌年には「**ancestralscotland.com**」が開設された。このウェブサイトはシンプルでユーザーが使いやすいようにデザインされており、地名、教区名、姓名を書き込むだけで様々な情報を入手できるようになった。同年にはグラスゴーと同時中継で、ニューヨークやトロント、オーストラリア、ニュージーランドにおいて先祖調査に関するテレビ番組が順次放映された。翌 2003 年には先祖ツーリズム産業運営グループのアンケート調査が実施され、回答数は 6000 に達した。この調査を通じてルーツ・ツーリズム市場の評価と経済的インパクトが研究された。たとえばルーツ・ツーリストが通年で訪問することが判明し、観光のオフピーク時でも集客できる可能性が示唆された。あるいは特定の観光地だけでなく、農村部を含むスコットランド全体への訪問者があることも理解された。訪問前には情報収集のためにインターネットが利用されていた。ビジターの満足度は非常に高く、ほぼ 100% の人々が再訪を希望していた。この調査に関してはエディンバラ、インヴァネス、グラスゴー、オークニーにおいてワークショップが実施された。こうして明らかになった結果が公表され、商品開発へと結びつけられていく。

スコットランド挙げてのルーツ・ツーリズム関連イベントの中心となるのは **Year of Homecoming** である。2009 年には国民的詩人と言われるロバート・バーンズの生誕 250 周年記念として実施され、スコットランド全土で大小約



写真 1 Homecoming Scotland 2009の看板
2009 年，グラスゴー国際空港にて筆者撮影。



写真 2 Family History at the Mitchell
2014 年，グラスゴー市立ミッチェル図書館にて筆者撮影。

300 のイベントがおこなわれた（写真 1）。この時のメインイベントはエディンバラにおける **Gathering 2009** であり，世界中のクラン関係者を一同に集めて実施された。そのメイン会場では先祖調査のブースも設けられた。次の 2014 年には，スコットランド軍がイングランド軍を撃退し，独立を維持したことで知られるバノックバーンの戦い（1314 年）の 700 周年を記念しておこなわれた。この時には，たとえばグラスゴー市立ミッチェル図書館に「**Family History at the Mitchell**」という先祖調査の専用コーナーが開設された（写真 2）。同館にはこれ以前にも比較的大きな先祖調査コーナーがあったが，2014 年には同市で「**コモンウェルス・ゲームズ 2014**」⁽⁷⁾も開催されたため，ディアスポラの来訪を見越してそのコーナーを大規模に改修したのである。

Homecoming イベントには政治性も含まれている。「ディアスポラ自身はそうのように見ていなくとも，**Homecoming** などのイベントはスコットランド国民党の独立キャンペーンの一部としてスコットランドらしさの感覚を強化するという意味もある」（Sim, 2012, p.109）。**Homecoming** が実施された 2014 年はバノックバーンの戦いの 700 周年であり，独立の是非を問う住民投票も同じ年に実施された。スコットランド国民党のような独立支持派からすれば，同国を構成する 500 万人という人口の何倍もの大勢力であるディアスポラは，質的にも量的にも重要なパートナーだと考えられているのである。

(5) ハイランドへの旅

ディアスポラは様々な局面で重視されているが、もっとも明確かつ高頻度に接触しているのはルーツ・ツーリストである。Blain (2014) は、先祖調査をおこなうルーツ・ツーリストたちに対して、インターネットを使えば現地へ向かう前に相当な情報を入手できるため、現地ではむしろスコットランドの様々な土地を楽しむべきだと呼びかける。では、彼ら・彼女らはどのような土地を訪問するのであろうか。

先にも触れたように、ディアスポラとの関係ではハイランドやクラン、あるいはジャコバイトといった言葉が散見される。ジャコバイトとは名誉革命(1688年)によって王位を追われたジェームズ二世に忠誠を誓う者のことであり、彼らが起こしたのがジャコバイトの乱(1745～46年)である。1745年にジェームズ二世の孫のチャールズ・エドワード・スチュアートを中心にハイランドのグレンフィナンで蜂起し、反乱最後の戦地であるカローデンでジャコバイトは全滅した。これによってハイランドの旧体制であるクラン・システムが崩壊し、クラン構成員の階層分化が生じた。クラン・チーフは貴族・地主となり、他のクラン構成員はハイランド・クリアランスによって排除されるか、小作人となった。そして「地代の上昇や地主の支配という恐怖からの自由」(Bigwood, 2009, p.29)のためにハイランドからの出移民が増加したという。言い換えれば、この一連の物語はローランドなど他地域のものではない。

しかし Ray (2012) によれば、たとえローランド出身者やアルスター・スコッツの子孫であっても、ルーツ・ツーリストの多くはジャコバイトが引き起こした出移民という大きな物語と関わる場所を体験したいと願うという。ルーツ・ツーリストは先祖調査で判明した自らの先祖の故地に向かう一方で、最初の訪問ではより大きな物語で語られる場所にも訪れる。ルーツ・ツーリストの70%はハイランド西部やスコットランド中北東部のグランピアンへ行く。実際の故地がイングランドとの国境地帯であるボーダーズでも、スコットランドの遺産により多く触れられるという意味でハイランドのスカイ島にも訪れるのである。こうした傾向は「ディアスポラのハイランディズム」(Ray, 2012,

p.171) と呼ばれ, 「ローランドではなくハイランド」(Sim and Leith, 2013, p.270) という話はルーツ・ツーリストの間では一般的である。特にカロードンに行く時, そこがスコットランドからの排除の原因だと認識されるため, ディアスポラの感情は最高潮に達するという。

さらに「家族史の新参者の間ではスコットランドらしさの本質としてクランを見なすという仮定がある」(Blain, 2014, p.167)。こうしてタータン製造業に代表される「クラン産業」が成立する余地がスコットランド全体で生まれるのである。

ツーリズム行政に関わる Taylor (2014) は, ツーリスト向けの書籍の中で「過去のロマン化された概念を通じてではなく, スコットランドの遺産や現代生活の現実の光の中で結びつきの感覚を理解すべきである」(p.139), 「スコットランドそれ自体について忘れてはならない」(p.119) と言っている。ディアスポラに対して故国への訪問を勧めるとともに, その現実や様々なローカルな場にも注目するよう訴えているのである。もっとも彼は, 具体的な旅程を提案する「1745 年の反乱 ある旅程」という文章(補遺Ⅲ)において, ハイランド, 特にジャコバイトに関わる旅を推奨している。つまりディアスポラの心情を踏まえた旅程となっているのである。図 2 は同書に記された 8 日間の旅程案を地図化したものである。ローランドの中心都市であるエディンバラやグラスゴーではなく, ハイランドのインヴァネスが起点である。インヴァネス空港でレンタカーを借り, グレンフィナン (D) などジャコバイトの乱に関する土地や民俗博物館, 一般的な名所旧跡, 2 つの国立公園を巡っていき, 最後にカロードン (J) を訪問して旅を終えることになる。

スコットランド系ディアスポラのルーツ・ツーリズムでは自らの先祖の故地だけでなく, あるいはそれ以上にハイランドおよびジャコバイトの乱に関わる土地への訪問がなされる。そしてツーリズムの文脈では, 故国の人々もディアスポラの意向を重視している。しかしディアスポラは「スコットランド人よりもスコットランド的」だと揶揄されることもある。ディアスポラをめぐる故国側の対応について今少し見てみたい。

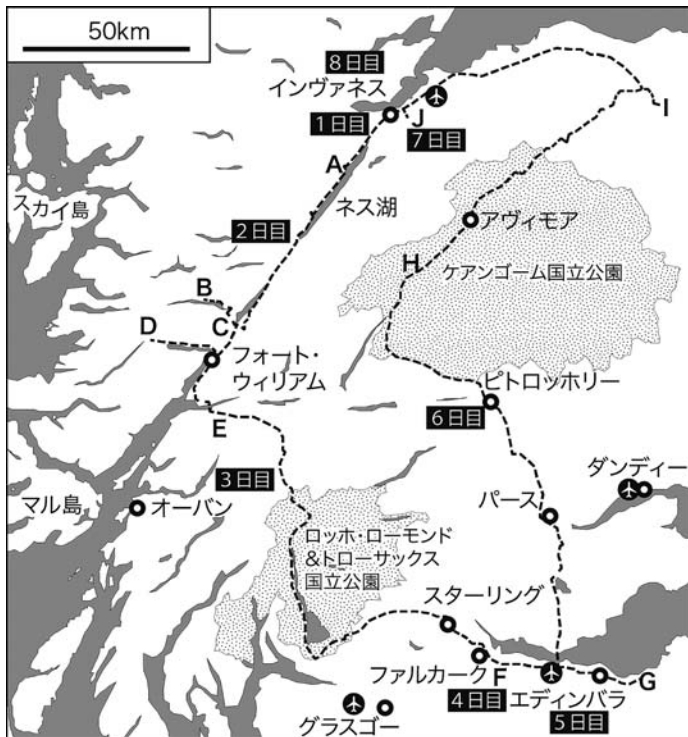


図2 ディアスポラ・ツーリストのための旅程案

注：図中の A はアーカート城, B はアーカイグ湖, C は Eas Chia-aig 滝, D はグレンフィナン, E はグレンコー, F はカレンダーハウス博物館, G はプレストンパンズ (古戦場), H はハイランド民俗博物館 (ニュートンモア), I はルースベン兵舎, J はカローデンを示す。

出典：Taylor (2014) の Appendix III 「1745 年の反乱 ある旅程」 (pp.153-160) により作成。

IV. ディアスポラをめぐる政治学

(1) ディアスポラ関与計画と多様なディアスポラ

スコットランド在住者はディアスポラの故地に対するアイデンティティを疑っており、ディアスポラをアウトサイダーとして扱ってきた。しかし「潜在的資源としてのディアスポラ」(Leith and Sim, 2014, p.8) に対する故地の態

度は明らかに変化してきたとも言われている。ディアスポラ・ツーリズムもまた、ディアスポラとの個人的なつながりに対する価値、そしてローカル経済との結びつきという経済的価値の2つの点で重視されている (Sim and Leith, 2013)。他方でスコットランドとディアスポラの関係は形成されつつあるが、低開発でもあるとされている (Leith, 2014)。

スコットランド政府は2010年に「ディアスポラ関与計画」を立ち上げるとともに、ディアスポラの6つの類型を示した (The Scottish Government, 2010)。**①先祖 (ancestral)** ディアスポラ、つまりスコットランド系の子孫。**②帰還 (returning)** ディアスポラ、つまりスコットランドに戻ってきたスコットランド人。**③新たな (new)** ディアスポラ、つまりスコットランドを離れようとしているスコットランド人。**④スコットランド居住経験 (lived)** ディアスポラ、つまりスコットランドで生まれたか居住経験があり、現在は他国で生活している人々。**⑤反転 (reverse)** ディアスポラ、つまりスコットランドで働いたり学んだりしている他国の国民。**⑥共感 (affinity)** ディアスポラ、つまりスコットランドと直接・間接に結びつきのある人々、である。

以上には分かりにくい概念がいくつかある。⑤の反転ディアスポラはスコットランド系ではなく、当人の出身国にとってのディアスポラである。④の一部にもスコットランド系でない人々が含まれる。⑥の共感ディアスポラは、Hesse (2012) によれば「ルーツなしのスコットランド人」とされ、Homecoming のキャンペーンにおいてスコットランド系以外の人々に対して「帰郷」を誘うためにこの語が創り出されたのだという。このようにディアスポラ関与計画で言うディアスポラとは、同国に居住する国民以外で同国に寄与し得るあらゆる人々を列挙したに過ぎない可能性がある。その証拠に、スコットランド政府は③～⑤のディアスポラを経済的利益の点で重視する一方で、①の先祖ディアスポラはイベント以外の場面では大した存在ではないと考えているという (Leith, 2014)。

ディアスポラを自国の経済的利益の資源と見なしているスコットランド政府は、ディアスポラ自身の発展や関与についてあまり考慮していない。しかしデ

ディアスポラの性格を考える上で先祖ディアスポラはなおも中心的な意味を持ち得る。すなわち、共感ディアスポラだけでなく、スコットランド系ディアスポラ全般についても「共感なしにスコットランドの夢の景観（dreamscape）が活力を得ることはないであろう」（Hesse, 2012, p.234）。ディアスポラを経済的・政治的な「資源」と見なすとしても、共感を得られなければその力を得ることはできないのである。スコットランド政府に対しては、ディアスポラが求める多様な要素を適切に理解すべきとの批判がなされている（Leith, 2014）。また、次のような興味深い動きも見受けられる。

（2）ディアスポラへの「謝罪」

スコットランド系ディアスポラの間には「ハイランド・ホロコースト」（Basu, 2006, p.147）と呼ばれる認識があるとされる。ディアスポラは「ホロコースト」や「ジェノサイド」といった大げさな表現を用いながら故地から他出した先祖や自らの境遇を語るというのである。折しもオーストラリアにおけるアボリジニとの和解のための法律（1991年）や南アフリカ共和国における和解の法律（1995年）が公布されるなど、「和解の政治学」がグローバルに登場してきた時期でもあった。

こうした動向を受けて、2000年には自由民主党スコットランド議会議員のジェイミー・ストーンがディアスポラに対して一連の歴史的経緯について謝罪し、スコットランド国民党議員のファーガス・ユーイングも同調した。この謝罪ではネイティブ・アメリカンやオーストラリアのアボリジニとともにハイランド系ディアスポラに言及したとされている（同上）。もちろんこうした動きが大規模化している訳ではないとしても、ディアスポラ自身の認識が考慮されることもあるのである。先に見た「1745年の反乱 ある旅程」での行程案も同様であった。

ディアスポラの動員のためには先祖や歴史をめぐる共感を喚起する必要がある。そのため、ディアスポラからすれば、実際に自らが先祖調査をおこなうかどうかは別にして、故国において先祖調査の制度や施設が整備され、ルーツ・

ツーリズムが推奨されているという状況にあることは重要なはずである。そうであればこそ、2001年設立の *Globalscots*⁽⁸⁾ のような経済的ネットワークにディアスポラが積極的に関与する余地も生まれることであろう。

V. まとめにかえて

先祖調査やルーツ・ツーリズムは基本的には個々人の営為である。しかしそれらは無数のディアスポラと故国をつなぐ集合的实践でもある。スコットランド各地のローカルな場に対する経済効果とともに、人口500万人のスコットランドがグローバルな力を得る方法として、数千万人とも言われるディアスポラの共感を喚起することが重視されている。おそらく故国側の思惑を成功させる鍵となるのは、ディアスポラに対する故国の共感を適切に示すことであろう。故国とディアスポラの双方から構成されるグローバルな想像の共同体を成立させるのは、共有された先祖や歴史をめぐる共感なのである。

こうした動きはスコットランドにとどまるものではない。*Agunias, ed. (2009)* によれば多数の国々においてディアスポラへの働きかけが強化されており、たとえば中国ではディアスポラを対象とした機関が先祖のルーツを検索できるデータベースを用意している。こうした現象は興味深いものであり、同時に危険な側面があることにも注意が必要である。2017年にアメリカ合衆国大統領となったトランプ氏にはスコットランド系の先祖がいるという。故国の先祖をめぐる意識が強力に喚起されるとき、故国からすれば有力な仲間を得ることにつながるかもしれないが、ディアスポラの現住国では社会の分裂に結びつく可能性もある。先祖調査にせよルーツ・ツーリズムにせよ、それらは単純に肯定されるべき実践とは言えないのである。また、故国において先祖や歴史が過度に強調された場合、スコットランドのディアスポラ関与計画で言われるような共感ディアスポラからの共感を失う結果を招いてしまうであろう。

なお、ルーツ・ツーリズムは日本でも確認される。おそらくその端的な例は沖縄県で開催されている世界のウチナーンチュ大会であろう（金城、2007）。

こうした現象や、それがもたらす地政学的帰結については十分に理解されていない。基礎的な事例収集も含め、さらに研究が進められる必要がある。

[付記] 本稿の内容の一部は 2015 年 3 月 29 日に開催された日本地理学会・エスニック地理学研究グループ（日本大学）で発表しました。関係各位に感謝申し上げます。

註

- (1) Tuan (1980) では「場所の感覚」を「根ざすこと」の対立概念として扱っている。
- (2) たとえば Gilroy (1995), ギルロイ (2006), クリフォード (2002) などがそれに当たるであろう。
- (3) Devine (2011) によれば、「スコットランドは公式にディアスポラを動機付け、関与しようとしたヨーロッパ初のネーションとされた。ただし『公式』のものではなかったとしても、アイルランドは 1990 年代から世界中の他出者との関係構築を頻繁におこなっていた」(p.286)。
- (4) 日本では近藤 (1990) が先祖調査の展開についてまとめている。また山口・喜多 (2014) も参照されたい。
- (5) なお、同様の内容については野間 (2008) も参照。
- (6) VisitScotland 傘下の Ancestralscotland.com のファイル名である。
- (7) コモンウェルス・ゲームズとはイギリス連邦加盟国・地域によって 4 年ごとに開催される総合競技大会のことである。なお、2014 年にはコモンウェルス・ゲームズに合わせて「スコットランドとコモンウェルス展」がミッチェル図書館で開催された。この展覧会もディアスポラに関連するものであった。
- (8) Danson and Mather (2014) によれば、Globalscots はスコットランドの信頼の拡大とディアスポラの関与・帰還の間の相乗効果や有効なサイクルを促進するために設立された。世界銀行は Globalscots について、高い技能を有する専門家に影響を及ぼすためのモデル・プログラムと評しているという。

参考文献

- 川分圭子 (2014) 「イギリス家族史・個人史の伝統と現在－アマチュアと営利企業の進出する歴史学－」京都府立大学学術報告（人文）66, 107-130 頁。
- 喜多祐子・山口 覚 (2008) 「現代スコットランドの先祖調査ブーム－調査手法の発展と系図学的想像力－」人文地理 60-1, 21-40 頁。

- ギルロイ, ポール, 上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳 (2006) 『ブラック・アトラ
ンティックー近代性と二重意識ー』 月曜社。
- 金城宏幸 (2007) 「ディアスポラの記憶としての『世界のウチナーンチュ』」, 安藤由
美・鈴木規之・野入直美編『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアンー新たな
出会いとつながりをめざしてー』 クバプロ, 99-119 頁。
- クリフォード, ジェームズ, 毛利嘉孝他訳 (2002) 『ルーツー20 世紀後期の旅と翻訳
ー』 月曜社。
- コーエン, ロビン, 駒井 洋訳 (2012) 『新版 グローバル・ディアスポラ』 明石書
店。
- 近藤安太郎 (1990) 『系図研究の基礎知識 第四巻 総括』 近藤出版社。
- 野間 恒 (2008) 『増補 豪華客船の文化史』 NTT 出版。
- ブルーベイカー, ロジャース, 赤尾光春訳 (2009) 「『ディアスポラ』のディアスポ
ラ」, 白杵 陽監修, 赤尾光春・早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読むー離
散を架橋するためにー』 明石書店, 375-400 頁。
- 山口 覚 (2013) 「ルーツとエスニシティーアレックス・ヘイリーと系図学的想像力
ー」 地理科学 68-1, 1-24 頁。
- 山口 覚・喜多祐子 (2014) 「先祖との絆をつくりだすー日本における先祖調査の展
開ー」 関西学院大学先端社会研究所紀要 11, 11-26 頁。
- Agunias, D. R. (ed.) (2009) Closing the distance: how governments strengthen
ties with their diasporas, Migration Policy Institute.
- Basu, P. (2006) Roots tourism as return movement: semantics and the Scottish
diaspora, Harper, M. (ed.) Emigrant homecomings: The return movement
of emigrants, 1600-2000, Manchester University Press, pp.131-150.
- Basu, P. (2007) Highland homecoming: genealogy and heritage tourism in the
Scottish diaspora, Routledge.
- Bigwood, R. (2009) A Celtic homecoming, Who do you think you are? 19
(March), pp.26-31.
- Birtwistle, M. (2005) Genealogy tourism: the Scottish market opportunities,
Novelli, M. (ed.) Niche tourism: contemporary issues, trends and cases,
Elsevier, pp.59-72.
- Blain, J. (2014) Ancestral 'Scottishness' and heritage tourism, Leith, M. S. and
Sim, D (eds.) The modern Scottish diaspora: contemporary debates and
perspectives, Edinburgh University Press, pp.153-170.
- Buelmann, T. (2012) 'Gentleman, I am going to the Old Country': Scottish
roots-tourists in the late nineteenth and early twentieth centuries, Varric-
chio, M. (ed.) Back to Caledonia: Scottish homecomings from the seven-

- teenth century to the present, Birlinn, pp.150-167.
- Danson, M. and Mather, J. (2014) Doing business with the Scottish diaspora, Leith, M. S. and Sim, D eds. *The modern Scottish diaspora : contemporary debates and perspectives*, Edinburgh University Press, pp.64-80.
- Devine, T. M. (1999) *The Scottish nation 1700-2000*, The Penguin Press.
- Devine, T. M. (2011) *To the ends of the Earth : Scotland's global diaspora, 1750-2010*, The Penguin Press.
- Gilroy, P. (1995) *Roots and routes : Black identity as an outernational projectm*, Harris, H. W., Blue, H. C. and Griffith, E. H. (eds.) *Racial and ethnic identity : psychological development and creative expression*, Routledge, pp.15-30.
- Hesse, D. (2012) Finding Neverland : Homecoming Scotland and the 'Affinity Scots'. Varricchio, M. (ed.) *Back to Caledonia : Scottish homecomings from the seventeenth century to the present*, Birlinn, pp.220-240.
- Kennett, D. (2011) *DNA and social networking : a guide to genealogy in the twenty-first century*. The History Press.
- Leith, M. S. (2014) Scottish politics and the diaspora, Leith, M. S. and Sim, D (eds.) *The modern Scottish diaspora : contemporary debates and perspectives*, Edinburgh University Press, pp.81-98.
- Leith, M. S. and Sim, D. (2014) Introduction : the Scottish diaspora, Leith, M. S. and Sim, D. (eds.) *The modern Scottish diaspora : contemporary debates and perspectives*, Edinburgh University Press, pp.1-16.
- Nash, C. (2008) *Of Irish descent : origin stories, genealogy and the politics of belonging*, Syracuse University Press.
- Nash, C. (2015) *Genetic geographies : the trouble with ancestry*, University of Minnesota Press.
- Newland, K. (2011) *Diaspora tourism, Diaspora matters*, pp.1-19.
- Otterstrom, S. M. (2008) *Genealogy as religious ritual : the doctrine and practice of family history in the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*, Timothy, D. J. and Guelke, J. K. (eds) *Geography and genealogy : locating personal pasts*, Ashgate, pp.137-151.
- Pine, L. G. (1960) *American origins*, Doubleday.
- Ray, C. (2012) *Ancestral clanscapes and transatlantic tartaneers*, Varricchio, M. (ed.) *Back to Caledonia : Scottish homecomings from the seventeenth century to the present*, Birlinn, pp.168-188.
- The Scottish Government (2010) *Diaspora engagement plan : researching out to*

- Scotland's international family, The Scottish Government.
- Sim, D. (2012) Scottish devolution and the Scottish diaspora, *National Identities* 14-1, pp.99-114.
- Sim, D. and Leith, M. (2013) Diaspora tourists and the Scottish Homecoming 2009, *Journal of Heritage Tourism* 8-4, pp.259-274.
- Taylor, C. (2014) *Rooted in Scotland : getting to the heart of your Scottish heritage*, Luath Press.
- Timothy, D. J. and Guelke, J. K. (eds.) (2008) *Geography and genealogy : locating personal pasts*, Ashgate.
- Tuan, Y. (1980) Rootedness versus sense of place, *Landscape* 24-1, pp.3-8.
- Weil, F. (2013) *Family trees : a history of genealogy in America*, Harvard University Press.